

十二月四日

昼前のアリタリア航空でミラノへ。松村秀一難波和彦と一緒にオフィスビルのコンヴァージョン委員会調査旅行。良く良く考えてみれば春の台湾中原大学行カンボジア行以来の海外である。モスクワ経由。昨日赤瀬川原平さんにライカにフィルムを入れてもらった。フィルムをハサミで切ったりして時間はかかったが見事な手際であった。私がかつぱり不器用であったのだ。二年間全くの無用の長物であったライカがようやく有用のモノになった。しかし、何か不安でミラノ行には持つてこなかった。久し振りにスゲツチブックをカバンに突込んできた。しかし、何も描かぬままに持ち帰るような気がするよ。今シベリア大陸の東端を飛んでいる。

除雪のため空港が閉鎖され少し遅れてモスクワ着。マイナス10°C。四〇分程休んで夕方六時五〇分ミラノ着。空港よりTAXIでHOTEL GRAND PLAZA。ミラノ市の中心、カテドラルに近いところだった。テロの影響でガラガラだと思っていながら飛行機はほぼ満席だった。ミラノは5°C。思ったより寒くない。

九時、食事。ミラノ在住の伊藤君を交しえ四名でカテドラル近くのレストランで。夜半十二時二〇分散会。ホテルまで歩いて帰る。いつものことだが東京を歩いている感じとは明らかにちがう。しかし、ミラノのカテドラルは明らかに砂糖菓子之城だ。が、ガ

レリアを含むその周辺の都市の造形、そして密度がちがう。カテドラルは学びようがない。しかし、都市の密度は学びようがある。空間じゃない密度なんだな。我々は都市に本能的な関心が無いのかも知れない。

十二月五日

七時前起床風呂に入る。しかし松村は良く喰べる奴だなあ。機内食なんて瞬間芸術的スピードで消えていってしまうし、昨夜もミラノ風カツレツ、ステーキ、パスタと連続して彼のいぶくるへ投げ込まれていってしまった。プロレスラーの坂口と飯を喰ったことがあるけれど坂口程ではないにしても、常軌を逸することは確かだな。相撲、格闘技を除き建築業界では安藤藤森クラスである。胃袋が強いので、かまわないで呑み込んでいる感じ。歯でかまないから余計なエネルギーを使わずに直接栄養分だけ吸収しているのである。しかし松村秀一がイタリア生活的価値観の持主であることを発見したのは収穫であった。大きな常識人なんだ。

七時半朝食。八時半ホテルを出て、ミラノ工科大学へ。ブツチ教授ヒアリング。昼前、化学研究所屋上キューポラに棲む写真家西川よしえさん宅訪問。双頭のドームならぬ尖塔付の小ドームが気に入って住み付いている人。オペラ座の怪人ならぬキューポラの麗人か。本質的なコンヴァージョンを自力で成し遂げてしまった人でもある。興味深い人物だった。自らの詩的直観に飛び込んでしまった人でもある。こういう正真な人は日本には居られないだろう。

ミラノ駅より昼過ぎの汽車でコモへ。テラー二のカサ・デル・ファッショ見学。期待もしていなかったが、予想通り期待外れ。にわとり屋という名のレストランでおそい昼食。これはおしい

かった。コモ湖畔のモニユメントとアパート、共にテラーニ設計の建築を見るが、全然受けつけず。というよりも反応しようがなかった。テラーニの軽さは建築自体への関心の密度の薄さから来てるんじゃないか。四時過の汽車でミラノに戻る。六時ホテル着いささか疲れた。八時研究室OG堀川来。皆でパスタを食べにゆく。夜十一時半ホテルへ帰る。明日はもう東京へ帰らねばならない。きつと今日ぐっすり眠って時差を解消するだろうから、明日は又帰り便で時差ボケを作り直すことになるのだろう。

十二月六日

早朝五時前に起きてしまう。TVをつけてみるが全チャンネル凄まじく下らない。ジエームズ・スチュアートが野球選手の格好してモノクローム画面に出ていたり、リオデジャネイロのドタバタピンク映画だったり、何やらで流石にスイッチを切った。アフガニスタンだけでなくパレスチナも大騒動になっているようだ。

イタリア、スペインのしぶとさの素は何なのか、昨日のヒアリングで印象的であったのは文化局の権力の強さであった。建築、および建築群の価値を強く国家的水準で積極的に認め、建設、保存行為に反映させているようだ。広い意味での観光・ファッション立国なのだ。ミラノ工科大学建築学科は一年生八百人程度の学生数らしいが、大量の学生を社会に出している現実が総合的には建築勢力の力になっているのではあるまいか。日本ではどうなのか。早稲田もヨーロッパ型の建築学科を目指すのか、アメリカ型でゆくのか思案のしどころではないか。理想は独自の路線なのだろうが、それはどう考えても不可能なのだから。可能性を考えてみるよりも、不可能性を考え尽くしていく方が現状では得策だろう。フィンランド、イタリア、スペインのしぶとさを見習う

べき時なのじゃなからうか。でもその研究は私の役割じゃない。むしろ松村に学生つけて研究してもらった方が良い。私にはその類の時間は残されてはいない。

ラテン建築システム研究会みたいなのを学生にやらせても良いな。六時前入浴。洗髪。今日は又、長旅だ。一日を楽しもう。荷造りと言っても小バッグ一つだけけど、それでもしといた方が良いかな。

七時半朝食。八時半出発。私はチエックアウトして松村先生の部屋に荷物を預けた。地下鉄バスを乗り継ぎおまけにしこたま歩いて、グレゴッタのスカラ座現場へ。ミラノ工科大学ピッチ教授の案内で工事中の建築およびピレリ工場跡地の周辺集合住宅を見学する。スカラ座は三年くらいしか正式には使用せぬものらしいが、出来は悪い。非常に悪い。設計施工共に悪い。現場が統括されていない。ピッチ教授のポジションはクオリテイ・エンジニアという事らしい。ゼネコンが居ないのでミラノ工科大学の先生が建築家の下に入ってクオリテイをコントロールしようとしているらしい。来年の一月中旬がこけら落としのオペラ公演らしいが、とても竣工は無理ではないか。見ないでいいものを見てしまった。汽車でミラノに戻る。地下鉄で運河沿いのコンヴァージョン事例見学へ。チーズ工場がアパートになっているものだが、だいぶん仕事荒くってチョットと日本向けの参考にはなりにくい。ここままでしてもミラノ市内に住みたいと言う人が居るのだろうが。アーティスト、フリーな人たちのギャラリーや仕事場も垣間見ることができたが、満足しているのだろうかの疑問を持った。昼食は運河近くのレストランで。リゾットがおいしかった。料理の名前もワインの銘柄も憶えられない。多分全く興味が無いからだろう。困ったものだ。食後カテラル地区へ戻る。食事疲れしてしまっ

た。カフェエコロンでカプチーノ。どうにも休みたくなかったのでホテルに戻り、難波さんの部屋で一時間半程眠る。いびきをかいていたそうだから余程疲れていたんだろう。これだけ歩いてこれだけ喰べてりや疲れるさ。夕方六時前に起きる。難波松村両先生と別れてTAXIで空港へ。ミラノ市内渋滞で全く車が動かずヒヤヒヤしたがハイウェイは良く走り一時間程で空港着。夜八時四分発のJALで東京へ。たった二日のミラノだったが疲れながら気持は休んだ感じ。両先生にはお世話になった。

十二月七日

日本時間昼の十二時眼ざめる。ミラノ時間は朝四時。ホテルでも熟睡した。この類の調査旅行はエコノミークラスしか文部科学省は認めないのだそうで、しかし帰り便は直行便でしかも空いていたから三席分座席のアームを倒して完全に横になることができた。むしろJALのエコノミークラスは全フロア畳敷きにしてお座敷にしてしまった方が効率的なのではないか。和風旅館風にして、真中に偽の川なんか流して蛇ノ目傘を配し、通路は板張り風にする。スーパーファーストクラスを設け、そこには露天風呂もどきを作り、ジュラルミンボディの一部を透明強化ガラスにして、満天の星月夜を我物にできるようにする。ごまんというだろうビジネス界の成金には受けると思うよ。ビジネススクラスのウィンドーには全て極彩色の金魚鉢をつくり込んでエキゾチシズムを増幅させ、ビジネスマンの頭の構造を飛躍に満ちたもののようにしたい。エコノミーの通路の川は水を干すと掘ゴタツにすることができる。JALは是非共和風飛行機を飛ばせ。外国人も喜ぶだろう。機体に子供向けの漫画を描いてガキにだけこびてる場合ではない。すでに到来している老人社会では老人にもこびるべきなの

だ。イイネ、翼に瓦の模様なんか描きまくって、尾翼には鬼瓦も描く。機内放送の合図はゴーンと寺の鐘を鳴らす。トイレの入口には鳥居をつける。スチューワーデスのファッションは大正文化住宅時代のカツパー着姿である。機内食のお代りは電気釜で保温したご飯をよそって廻る。七輪持込禁止のワッペンがわざとらしく貼ってある。このわざとらしさが重要だ。明るく軽い感じが突きつめられた、かくの如き、いかにもなわざとらしさは今の日本社会の通奏底音である。それを突き破るには自分で自分を笑ってみせるしかないだろう。すなわちJALはかくの如き悪趣味の極みの宴会お座敷便を国際線に飛ばすべきである。そこまでやれば一気に下品は上品に逆転する。

こんな事考えてる位だから、どうやら疲れは抜けたようだ。明日の広島行、明後日の佐賀、福岡行は大丈夫そうだ。眠りは人間を再生させる。あと三時間半でNRTに着くだろう。シベリアは雪が少ない。危いね本当に地球は温暖化の径を突き進んでいるんだろう。